

『追悼 猪俣史郎先生』

2022/12/19 12代校長（1期生） 大澤一郎

猪俣史郎先生は山手学院創立3年目の昭和43年（1968年）に、国語科の教員として赴任してこられた。着任後、熱意のある1期生を中心に猪俣先生に懇願して山手学院空手道部が創られたことは、空手道部の周年誌に何度も語られているので割愛させていただくが、当時は現在の保健室の前には正拳突き練習用の巻藁が何本か立てられて、生徒寮の夕食後、夜の自習時間開始までのわずかな時間にも練習に足を運ぶ部員の姿をうらやましく見ていた記憶がある。当時の同僚の先生方にも空手の手ほどきをされていたようで、ある先生は「いのさん（猪俣先生）の足刀は鎌のように鋭い」と言っていたことを思い出す。卒業まで国語を教えていただいた私にとっては、高3時の副担任でもあった。

山手学院がピンチを迎えた時代、猪俣先生は生徒寮で寮生の指導に入られていた。寮長時代の猪俣先生は、当時の山手教育の『五本の柱』の一つを担う寮教育をどう立て直していくかに精力を注ぎつつも、その先の学校の行く末のことを常に考えておられた。

モンブランの極太万年筆で、いつもご自身の考えをカタチにするべく書かれていたたくさんさんのメモ書きを思い出す。

そののち猪俣先生は、教員集団向けに方向性を示し、文書にして思いを伝えるためにワープロを買われた。すぐにでも考えを文書にしたいという思いで、最初のワープロはなんと五十音配列のキーボード。多岐にわたる業務の合間を縫ってたくさんさんの文書に推敲を重ねるうちに、酷使によって、最後には押した文字のキーが戻ってこなくなってしまった。いつも冷静な分析と高い熱量で臨まれていた。

校長として人前に立つことが多くなると、手品を練習されるようになり、学校説明会などでも披露されるようになった。回を重ねるごとに上達されていくお手並みには、しばしば驚かせられることもあった。学外でも猪俣先生の手品は有名であった。

新年度がスタートして間もないある日、急遽自習になった中1のクラスに突然猪俣先生が入ってこられた。一瞬にして静まり返り緊張する新入生を前に、先生は手品をして見せてくださった。思いがけない校長先生の手品と優しい眼差し、語り口に、とても安心して益々山手学院が好きになったと、当時の生徒たちが語っていたことを思い出す。

猪俣先生は、山手学院の大きな変革の時期を、学校としての次の成長段階へと繋ぐために、大きな力となってくださった。山手学院のお二人の創立者の思いが途切れることなく現在まで引き継がれていることは、猪俣先生が学校の未来を常に考えながら、学校の歴史・創立者の思いを大切にすることを、当時熱心に語ってくださったおかげであると思う。

猪俣先生退任後も、毎年、新入生に配布してきた『フレッシュマン諸君への手紙』という冊子がある（2018年まで配布）。表紙には「若人よ、誇り高き青春を！」と書かれてある。この冊子が作られたのは1994年。長い時を経てはいるが、そこには山手生として学院生活の一步を踏み出す生徒たちへの思いが込められている。お二人の創立者がどのような思いで山手学院を立ち上げたか、人としてどのようにあってほしいか、20ページにも満たないこの一冊の中に、大切なことが凝縮されている。また、創立者の残したいくつかのキーワードがきちんとちりばめられていて、かつ誤解を生まないような書き方をされている。

猪俣先生はいつも推敲に推敲を重ねて、あとに続く者たちに文書というかたちで思いを残してこられた。『フレッシュマン諸君への手紙』は生徒たちに残した宝物であったと思う。

その最後のページには、

- 一、山手生は常に『考える集団』であってほしい。
- 一、山手生は常に『誇り高き集団』であってほしい。
- 一、山手生は常に『挑戦する姿勢を持った集団』であってほしい。

と書かれている。

これは旧生徒寮の食堂の壁の高い位置に、猪俣先生ご自身が墨書して貼られた内容と同じである。当時の寮生はもとより、のちに全校生徒向けの学生食堂とし開放されてからも、昼食や自習のために日々訪れる生徒たちの目にとまり、その記憶に刻まれていくのである。

『フレッシュマン諸君への手紙』は、次のような言葉で結ばれている。

新しい山手生よ、フレッシュな若者たちよ！
高く、遙かに、飛翔せよ！

人は生きていれば出会いも別れもあると、ことあるごとに話しておられた猪俣史郎先生。本当にありがとうございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

絶えることない感謝と、猪俣史郎先生の篤い思いを受けた山手学院の発展を祈って。